



MACABRE ARCHITECTURE

マカブル・アーキテクチャー

朽techS 2013

Mature Content



*How come someone hasn't noticed that I'm dead  
and decided to bury me? God knows, I'm ready!*

- |             |           |
|-------------|-----------|
| ◆書庫樓のガーゴイル  | ◆澁みを乱すもの  |
| ◇血まみれ人鳥mk-I | ◇稲妻の貴族階級  |
| ◆智慧の木       | ◆大鰐通りの裁定官 |
| ◇尊大な魂喰らい    | ◇地擦りの百人隊長 |
| ◆凶星運び       | ◆始祖サーベント  |
| ◇酔歩する邪視者    | ◇執行の黒犬    |
| ◆惨禍を漂うもの    | ◆焦かし姫     |
| ◇サラマンダーの靄裂き | ◇死せざる胡蝶   |

ルチオ・フルチに捧ぐ

どんな夢よりも甘美な悪夢への感謝と愛を込めて。



女は一人ひとり、自分の内側に人と違う自分だけの規則を

発条(ばね)仕掛けのように持っている

——ブルーノ・シュルツ『砂時計サナトリウム』

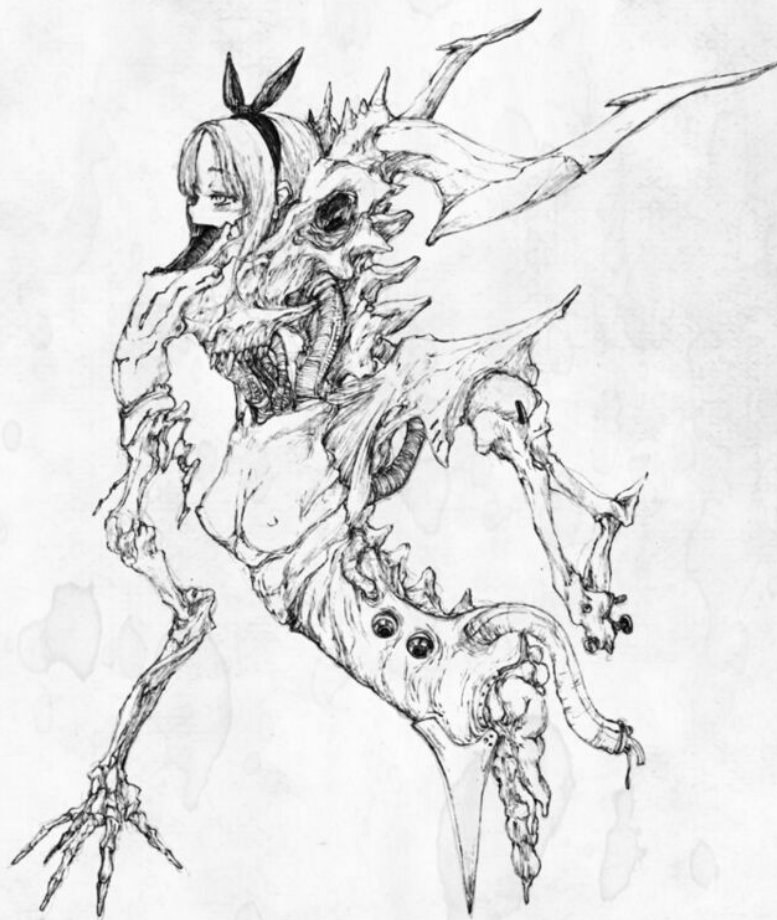
僕は以前は死がまだこんなではなかったにちがいないと考える。

そのころはだれもが、果実が種を秘めているように、自分の内部に  
死を秘めているのを意識して（あるいは、感じて）いたにちがいない。

子供は小さな死を、大人は大きな死を秘めていた。

女はそれを胎内に、男は胸中に秘めていた

——ライナー・マリア・リルケ『マルテの手記』



◆書庫楼のガーゴイル / Library Tower Gargoyle

彼らは彼らでインクのシミでもって

死に抵抗したのだ、それを笑うまい。

嵩張らないだけそっちの方がマシかも知れん。

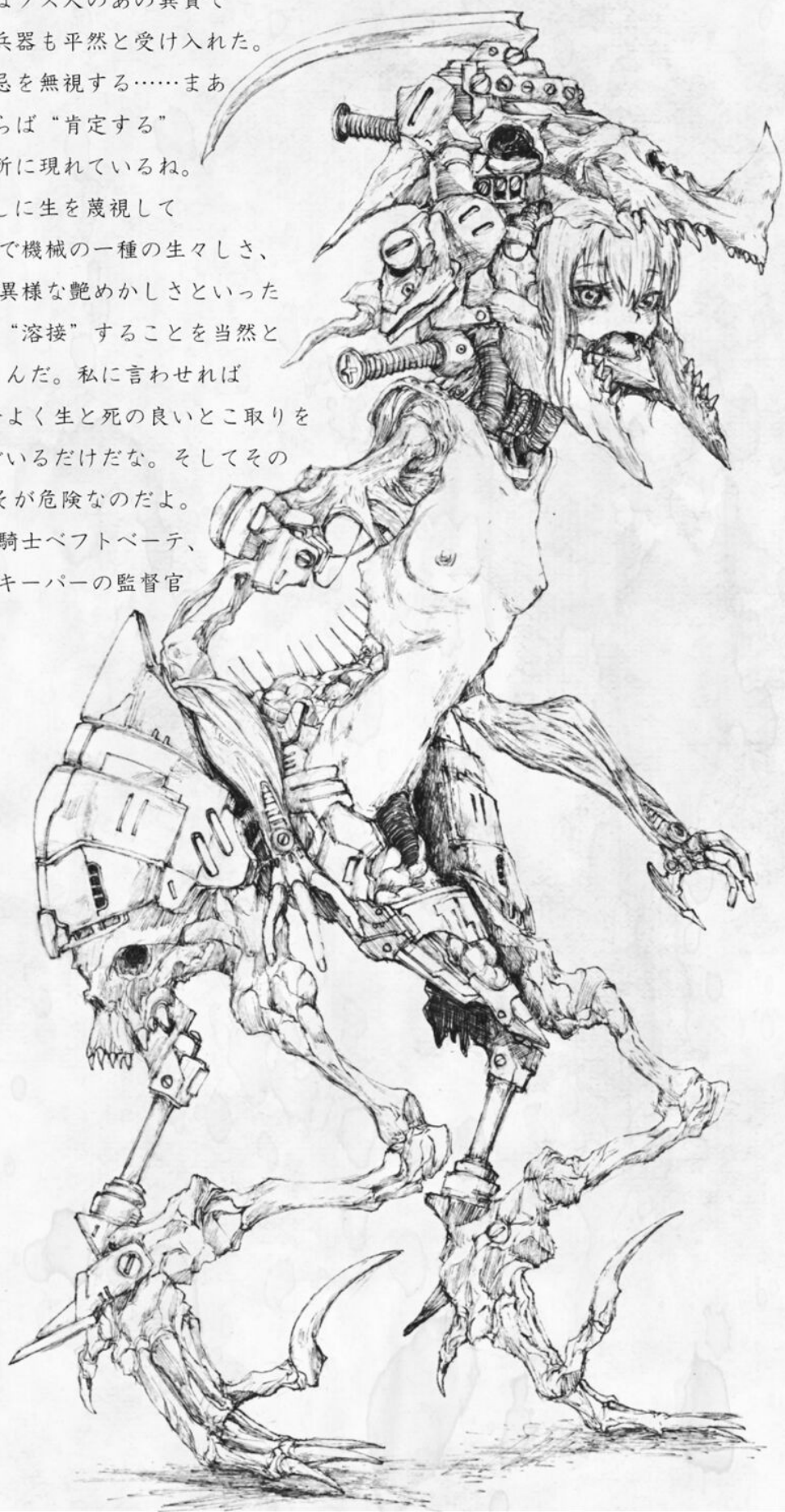
——ペタラ・フォリー、大沼のネクロマンサー



## ◆血塗れ人鳥 I / Sanguin mk-1

エンジニアたちはゾス人のあの異質で  
不気味な装置や兵器も平然と受け入れた。  
彼らの矛盾や禁忌を無視する……まあ  
好意的に言うならば“肯定する”  
能力はそういう所に現れているね。

これ見よがしに生を蔑視して  
見せる一方で機械の一種の生々しさ、  
生物以上の異様な艶めかしさといった  
ものを屍に“溶接”することを当然と  
思っているんだ。私に言わせれば  
彼らは都合よく生と死の良いとこ取りを  
して遊んでいるだけだな。そしてその  
幼児性こそが危険なのだよ。  
——<sup>しょう</sup>漿の騎士ベフトペーテ、  
テックキーパーの監督官





彼女たちを動かすのは、  
原罪の焔が帯びる熱さ。  
ひとは罪と傷によって  
生きるのだから、それが  
燃え尽きた彼女たちの  
髄には、悦ばしき知識  
だけが残っているのでは  
ないかと、よく先生は  
仰っていたものだ。

——ヤニック・ロシェ

元Vの門下生



“共和国”の成立の過程における大沼の  
ネクロマンサーたちの追放に関しては  
かなり詳細な資料が残っている一方、  
追放された彼らがどこへ行ったか  
についてはよく分かっていない。  
大部分が“龍の墓場”“環月”  
そしてタラールのネクロポリスに  
流れたというのが定説なのだが。

——『ファーランド・ミカアの手記』



あの佳境においてマスター・バルビエが事件の責を問われて粛清されたことそれ自体が、  
 雲の騎士の策略だったのではないかという説もあるのだが、著者としては異説を唱えさせて  
 頂きたい。前述のとおり、マスター・3Nは大沼のネクロマンサーの生き残りである可能性が  
 高く、彼が内部から共和国への復讐を図る動機は充分であると考えられる。真実はどうあれ、  
 バルビエの死によって「十曜」の新規設計は滞り、戦争末期のいわゆる  
 “天才的な季節”まで重ネクロテックは旧式化の一途を辿っていった。  
 クヴェレの魔女が新たに投入したマルグの上位種、超大型悪鬼や  
 奇眼朝フォルムスから輸入されたウォーキマイラ  
 への対処はどんどん困難になっていったのである。  
 ——ミランダ・ベリシャ

『トーテンタンツ〜共和国戦史』

あの重ネクロテックは十曜シリーズってやつの一体だと、  
 本気でヤバかった戦場の帰りに曹長が教えてくれたんだがね。  
 もっと早く教えて欲しかったさ、我々はバラして食えない奴に  
 興味なんてないんだからさ。他所の戦線の同胞から噂だけは  
 聞いてたんだよね。屍者の無感覚さにしっかりした質量を伴う  
 頑丈さが合わさって、我々の解体技術もかなしなのさ。  
 あんなもんばかり相手にするくらいだったら“龍の墓場”で  
 臭いゾンビどもに包囲される方がまだマシってものだよ、  
 いや本当にさ。

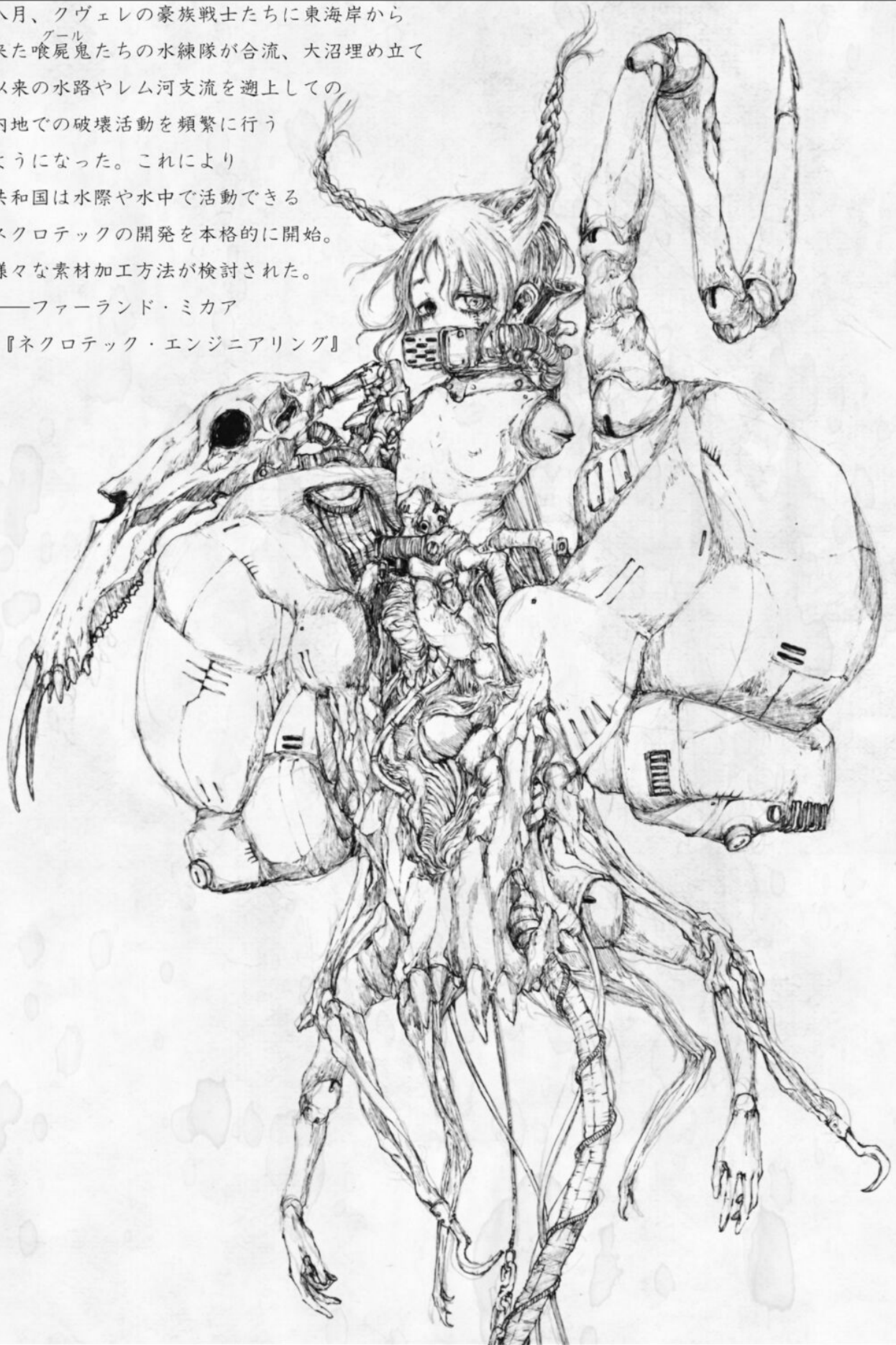
——フローレンス・ビックマン、<sup>デビル</sup>喰屍鬼の傭兵隊長



死体たちは工場で  
数えられ、測られ、  
そして切り分けられる。  
様々な部位が、本来の  
役割を漂白されて  
我々の目的に応じて  
改めて組み上げられるのだ。  
だが顔だけは、顔であり続ける。  
顔は生死の向こう側に存在している。  
——ター・ペルラ・シュット、  
クロンダイクの下顎職人

## ◆惨禍を漂うもの / Atrocity Floater

八月、クヴェレの豪族戦士たちに東海岸から  
来た喰屍鬼<sup>グール</sup>たちの水練隊が合流、大沼埋め立て  
以来の水路やレム河支流を遡上しての  
内地での破壊活動を頻繁に行う  
ようになった。これにより  
共和国は水際や水中で活動できる  
ネクロテックの開発を本格的に開始。  
様々な素材加工方法が検討された。  
——ファーランド・ミカア  
『ネクロテック・エンジニアリング』



◆サラマンダーの霧裂き / Salamander Fogslasher

“天才的な季節”はな、あの頃にはもうテックスには私と俗物のアカライネンぐらいしか国のために働いているマスターはいなかった、だから工場も工員も“材料”も好き放題出来たということだ。あのタイミングでルカーチをハメて追放したのは本当に最悪だったが、まあ私は曲がりなりにもこうして生きているわけだよ……私は、これまでマスターの陰で無名のままでいたエンジニアたちに活躍の場を提供してやったのさ。あのときデラモルテが引きこもってなければ、奴も傑作を作ってくれただろう。ああ、私は治安維持部からの出向者で、マスター・ネクロテックの立場もあくまで思想監視の便宜のためのものだと言われていたし、それは事実だ。だがね、私自身彼らの作品が好きだった、  
というのもまた事実なのさ。

——レーモン・T・スターラン、  
マスター・ネクロテックの戦犯、  
戦後10年経っての獄中インタビュー

死者たちはもっとゆっくりと歩くべきではないかね？  
ゆっくりと歩き、しかしそれでいて決して振り切られない、  
それが我々を追いかける死というものの姿だ。  
そうとも、それが世界のいち要素としての規範だ。  
死者が歩く時点でルール破りと君は言うかもしれない。  
だがそれは、単に異なる、新しいルールというだけだ。  
——“骨紡ぎ” ストルベン・ウィンターハルター、  
龍の墓場のネクロマンサー

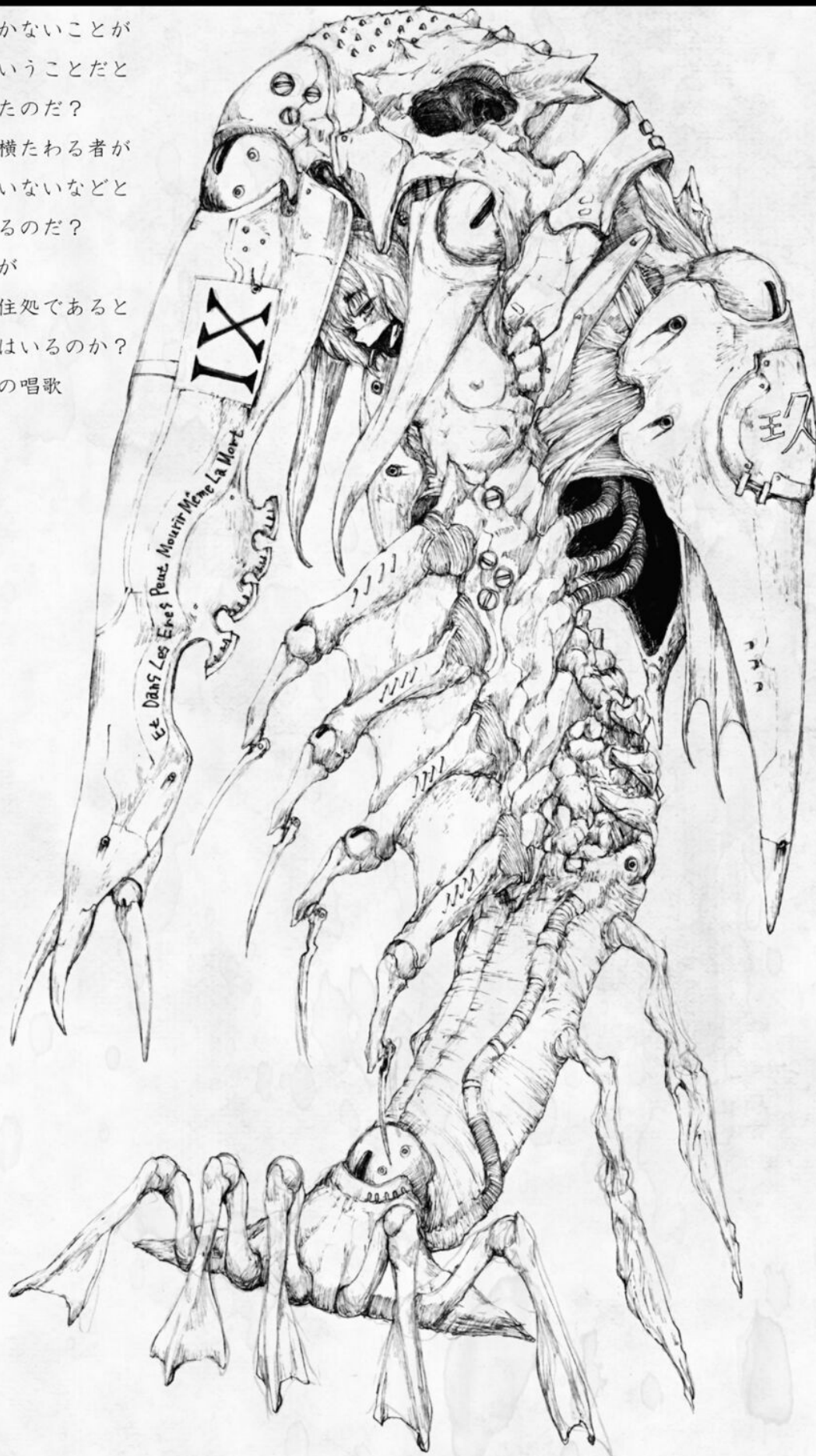
有毒の霧にかすむ  
おぞましき黄色の空  
それは青白い女の脇腹の黄疽の色。  
上天の眼より狂気が  
大気へと流れ出す。  
黒く萎れた木々の枝は  
引き攀った指のごとく震え  
最期の雨を待っている  
最期の正気を絞り出した雫を。

——クランブ・サヴィエ わんしば『病葉譚』、第三章



◆ 澱みを乱すもの / Disturber Of Dark Water

じっと動かないことが  
安らうということだと  
誰が決めたのだ？  
地の底に横たわる者が  
苛まれていないなどと  
なぜ言えるのだ？  
冷たい土が  
心地よい住処であると  
試した者はいるのか？  
——大沼の唱歌

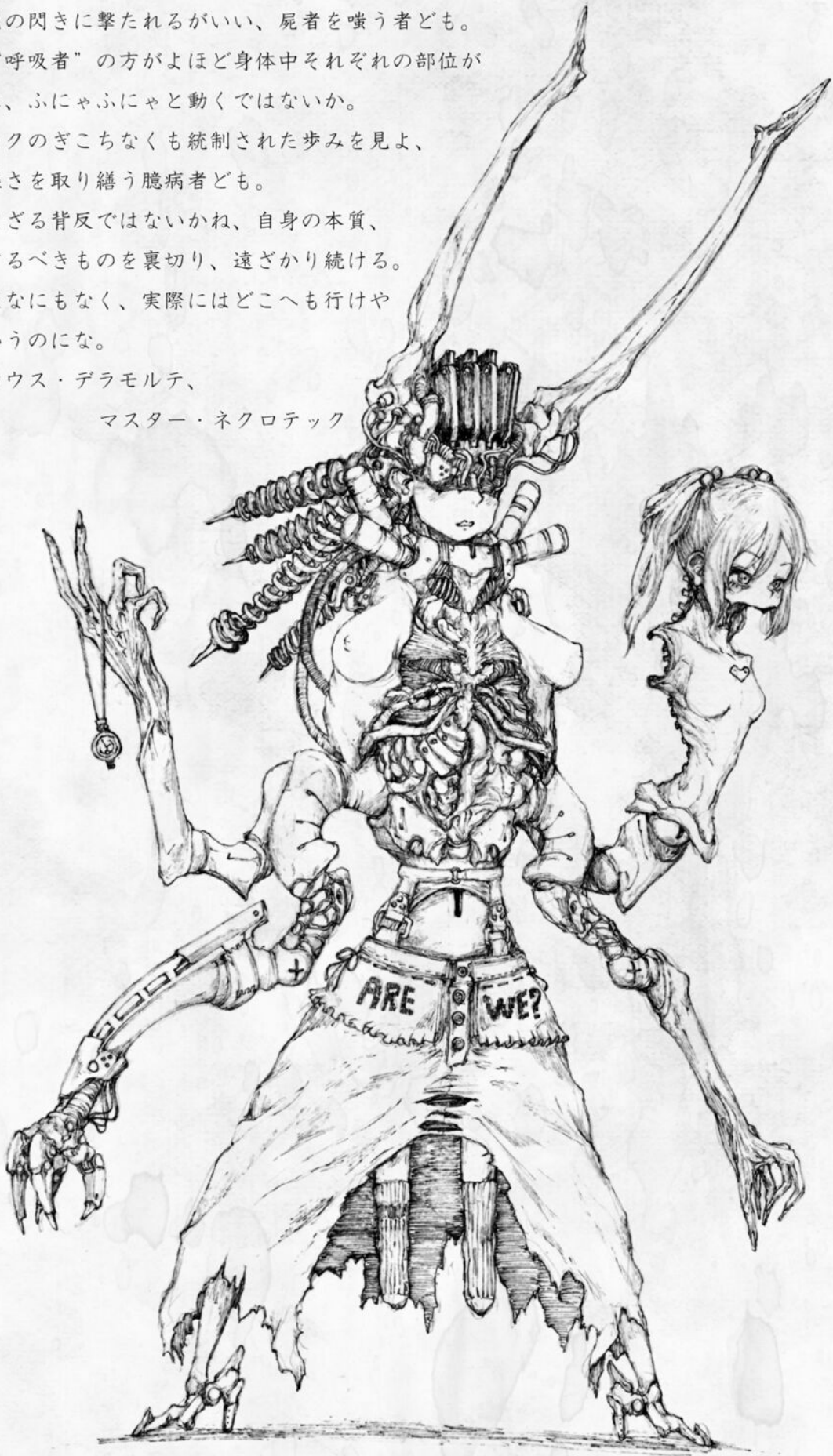


◆稲妻の貴族階級 / Thunderbolt Aristocrat

屍電の緑色の閃きに撃たれるがいい、屍者を嗤う者ども。  
お前たち“呼吸者”の方がよほど身体中それぞれの部位が  
バラバラに、ふにゃふにゃと動くではないか。  
ネクロテックのぎこちなくも統制された歩みを見よ、  
存在の不様さを取り繕う臆病者ども。  
生とは絶えざる背反ではないかね、自身の本質、  
己が表象すべきものを裏切り、遠ざかり続ける。  
その先にはなにもなく、実際にはどこへも行けや  
いないというのにな。

——カッシウス・デラモルテ、

マスター・ネクロテック



◆大鰐通りの裁定官 / Adjudicator Of Crocodile Street

あなたはまるで夏の残骸を吸ってるみたいに見えますわ。

——ピエレッテ・タイエット

『冷製』第一幕より



◆地擦りの百人隊長 / Groundscraper Centurion



確かにネクロウェアはどんどん

複雑なものになっています。

しかし「偏在と組織」論はまさに

省容量で複雑性を実現するために

マル教授とマスター・シャフルが

構築したものです。ほら、あの小さな

“<sup>ヘッドバグ</sup>自走計算体”を見ていただければ、

それがどれだけコンパクトな

制御系か分かるでしょう。

頭部とは結節点なのです。二つの頭部とは

二つの要点があるということに過ぎません。

——イラ・アルフレッドソン、

おき  
燐テックス研究員



安心しきっているからこそ、  
彼女を自由にさせてさ、それを  
度量と勘違いしてるわけだ。そして  
ある日、そのすべてが間違いだったと  
気付くんだよ……昔似たようなことを  
サロンでしゃべってたら、クロンダイクが  
そういう見方自体女を馬鹿にしてるって  
怒りだしてね。いや、本気で腹を立ててた  
わけではないんだろうがね。僕たちも色々  
痛い目に遭ったんだよ、テックスじゃ若者は  
少数派だったからさ、本当、色々、色々さ。  
……すべては遠くになりけり、だな。

——クラリモンド・バーナバス、燠テックス主任



罪人由来の素材ほど、  
福祉に利用すべきだ  
という風潮が確かに  
ありましたね、特に義肢  
に関してはそうです。

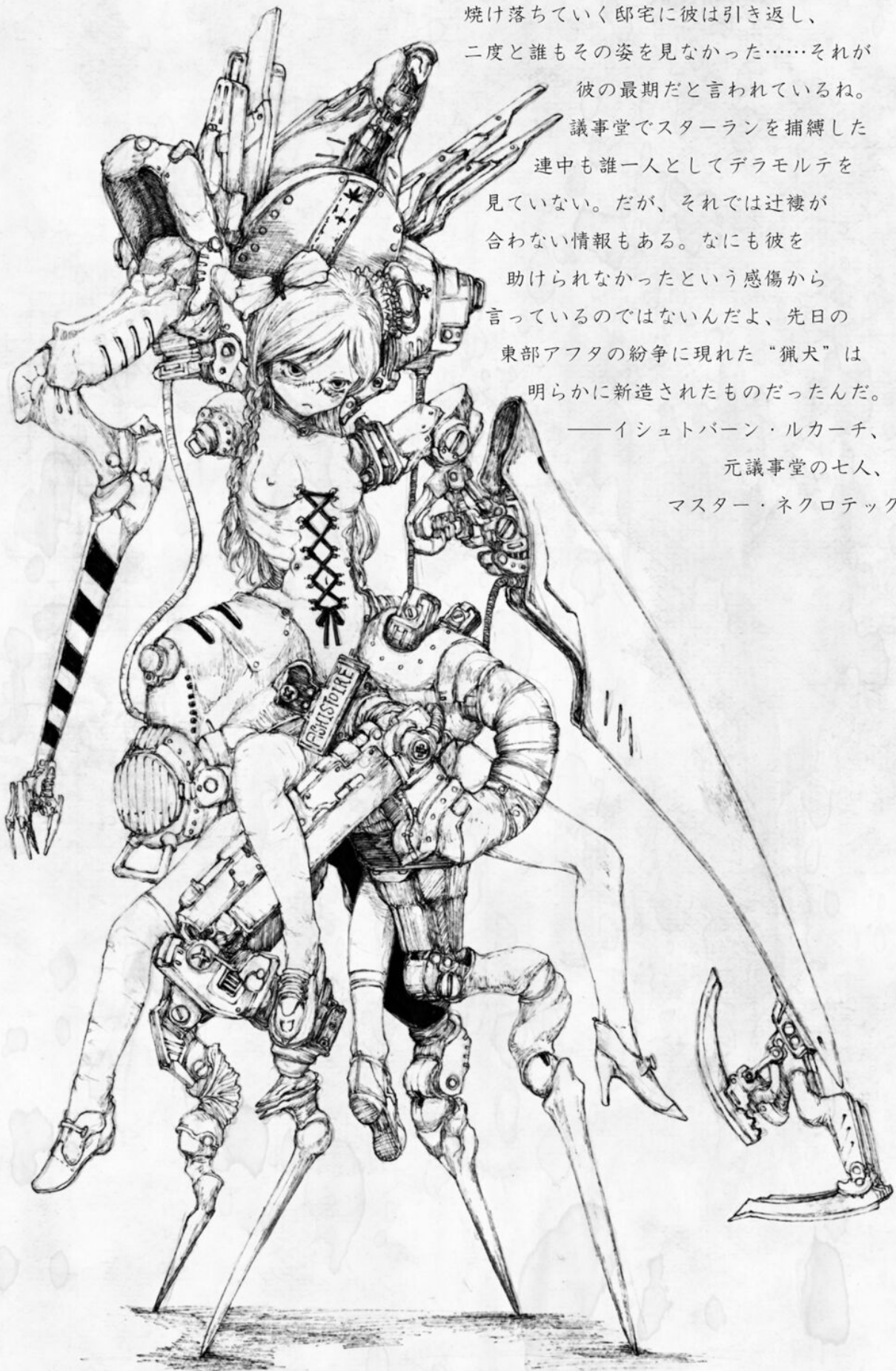
死後に善行を積ませて  
あげようってことなの  
かも知れませんね。

——“鉄板入りの”

マル教授

◆焦がし姫 / Scorching Her Highness

焼け落ちていく邸宅に彼は引き返し、  
二度と誰もその姿を見なかった……それが  
彼の最期だと言われているね。  
議事堂でスターランを捕縛した  
連中も誰一人としてデラモルテを  
見ていない。だが、それでは辻褄が  
合わない情報もある。なにも彼を  
助けられなかったという感傷から  
言っているのではないんだよ、先日の  
東部アフタの紛争に現れた“獵犬”は  
明らかに新造されたものだったんだ。  
——イシュトバーン・ルカーチ、  
元議事堂の七人、  
マスター・ネクロテック





あかぎれし <sup>な</sup> 汝が手にこそくちづけんとす  
痛みの給餌こそ 我が愛の創を癒さん  
嗚呼 青き星 <sup>か</sup> 斯くも 我を毒しけり  
——ゾスの渉外種“オトゥームの喉”最期の唱 <sup>うた</sup>

▼「身の毛もよだつものたち」に癒される自分を見つめる毎日でございます、皆さまお元氣でお過ごしでしょうか。赤、青、黄の順で発行いたしましたネクロテック三部作、その締めが本作になります。今作がはじめましての方、赤あるいは青のどちらかは持ってないぞという方は申し訳ございません、いつか総集編を出したいという気持ちだけはありますので氣長にお待ちください。いつ自分が枯渇してしまうのかという不安を感じながら着手したのですが、やはり描き尽くすことのできないほどの豊穡さが異形というものにはあって、わたしはその無限の泉から汲み取った輪郭に少女屍体機械というテクスチャーを与えているだけなのだという認識が日に日に強くなっていきます。とはいえ、そのそれ自体ではなにものでもない“かたち”に己の「スゴイ・カワイイ」を叩き付ける作業こそが、わたしが人類の一員であることの証明でもあるのです。本当に。

先人たちは“生ける屍”に様々な意味を、あるいは無意味を込めてきました、「だが、その死が何ものなのか。われわれはかつてラテン語でしか神を語れなかった。死について語るなら、われわれは新しいラテン語を創らなくてはならないのかもしれないかもしれません」（吉川良太郎『ペロー・ザ・キャット全仕事』より）、そう、われわれの生が曖昧になったいま、あたかもゾンビこそが「新しいラテン語」であるかのように。死はかつて我々が思い描いていたようなものではなくなってしまったのかも知れず、そもそも思い描くことそれ自体困難になった。そう感じられるとき、死の代替物、おどましき生ける屍が、それでも我々が生きて死ぬこの世界を支えるための“構造”として内面に立ち現われるのかもしれない。

いずれにせよ、我々自身生きている以上は常に死んでいっているのだから、生者と死者を行ったり来たりする在り様はむしろ自然なのではないかと思えます。濃くなったり薄くなったりする、というだけでは表現し切れないアспектについて言っているのです。

それでは、健全なる虚無より愛を込めて。またお会いしましょう。



奥付け

『マカブル・アーキテクチャー』

2013/10/20、COMITIA106にて発行

著者：メグリム・ハルヨ（朽techS）

連絡先：haruyoi@hotmail.co.jp

<http://unicaschamber.meb.fc2.com/>

pixivID=133923

印刷所：ねこのしっぽ（有）さま

Techkeeper licensed NM-ID-62-GF-2611

D5440 ¥500E

発行：ゴールデン・ゴブリン・プレス / 朽techS 出版部

定価：(本体 500 円)

